週刊読書人 2010/12/24 No.2870. p.8

マスコミ

グローバリゼーションの波がますます市民社会に浸透

リークに揺れる世界と足並みをあわせる

鈴木雄雅

政権交代と「脱小沢」に始まった政治は、リークに揺れる世界と足並みをあわせている。グローバリゼーションの波がますます市民社会に浸透してきたかの一年であった。

まずはネットを駆使して内部情報を暴露するウィキリークス、尖閣諸島沖事件で流出する情報の開示問題については、藤田博司『どうする情報源—報道改革の分水嶺』（リベルタ出版）が秀逸である。通信社の外国特派員、大学教授と平世紀近くジャーナリズムの現場＋教育の場に自らを置いた著者が、まさに「経験知と言語知の融合で成り立っている」（二〇〇九年マスコミ回顧参照）この領域に貴重な提言をしている。藤田は慣習化している情報源の匿名化から「情報源の開示」が報道への信頼を生み、報道改革の分水嶺と説く、また米国を代表するメディア専門家、アレックス・S・ジョーンズ『新聞が消える ジャーナリズムは生き残れるか』（古賀林幸訳、朝日新聞出版）は、新聞の衰退＝ニュースの危機が民主主義の危機につながるとし、客観性、報道倫理のような伝統的ジャーナリズムの重要性とともに、報道の公共への奉仕が重要であると主張する。

他方、奥村倫弘『ヤフー・トピックスの作り方』（光文社新書）や中川淳一郎『今ウェブは退化中ですが、何か？—クリック無間地獄に落ちた人々』（講談社）はネット側からの、いわばニュース論でもあるが、明石昇二郎『グーグルに異議あり！』（集英社新書）などはおもしろい。二〇一〇年が電子出版元年かどうかは別として、iPadをはじめとして電子書籍を手軽に読める媒体の登場は、石川幸憲『メディアを変えるキンドルの衝撃』（毎日新聞社）のようにネットの優位性はもちろん、旧来のジャーナリズム・メディアの衰退を明言するものの、それはまた新しい時代の幕開けであることを促している。そうした中で、内田樹『街場のメディア論』（光文社新書）は、実は「コミュニケーションの本質について理解しているかどうか」が危機的状況を生き延びる力ギであると言い、その本質を問うことの重要さを指摘しているのは興味深い。

なぜか後ろ向きに走っているとしか思えない大手メディアとそこに安住した旧メディア人の著作が氾濫するなか、例えば高田昌幸・清水真（編）『日本の現場—地方紙で読む』（旬報社）などは一貫して持続する社会問題を丹念に追っている。その主役が実は地方紙であり、それはジャーナリズムにとっても大事な庶民の目線であることを見事に描き出している。大西正行『マスメディア論—現場と社説と地方紙と』（春風社）もあげておく。「抜きつ抜かれつ」やリークに振り回されるメディアも無くては困るかもしれないが、より身近なところにあるメディアの仕事を知るに役立つ。

ジャーナリズム、マスコミのあるべき姿を探る努力は地道ではあるが続けられている。朝日新聞社ジャーナリスト学校と慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所（編）『報道現場』（慶應義塾大学出版会）は講義録を再編集したもので現場からの生きたジャーナリズム報告である。そして「ジャーナリストの行為規範の研究」を副題に掲げた塚本晴二朗『ジャーナリズム倫理学試論—ジャーナリストの行為規範の研究』（南窓社）も、ジャーナリストが自らを律するための基盤、原理の追及を試みている。「研究者と現場との協力」を訴えている。

情報の自由・規制・保護をめぐっては、山口いつ子『情報法の構造—情報の自由・規制・保護』（東京大学出版会）が表現の自由の古典的議論からユビキタス時代のサイバー法、知的財産権、自由な情報流通と幅広く扱っている。

リスク・コミュニケーションという新しい領域を開拓しつつある福田充『テロとインテリジェンス—覇権国家アメリカのジレンマ』（慶應義塾大学出版会）は9・11以降のアメリカ社会とメディアを描きつつ、日本社会の危機管理の在り方を問うている。

最後の二冊は映像流出問題やウィキリークスに揺るがされる社会的問題の本質を理解するためには良書であろう。（すずき・ゆうが氏＝上智大学教授・新聞学専攻）

週刊読書人合本
09年版
■定価一七八五〇円（制作僅少）送料別
出版読書界、文化界の動向と情報を知り、諸分野を展望するための一級資料として、図書館・学校・団体・会社・書斎にお備えつけ下さい
◇二〇〇九年発行の本紙をそのまま製本
お申し込みは書店または直接本社へ
好評発売中